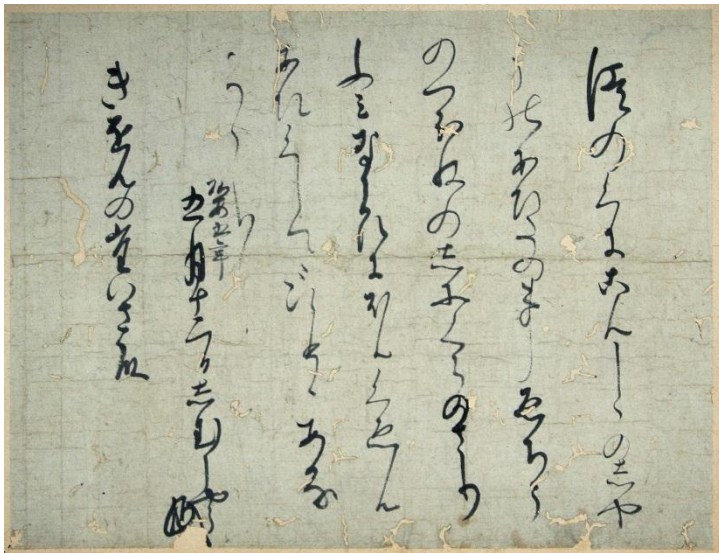


情報交流で解明される地域の歴史

三田地区の寺村町の旧地名は、有馬郡寺村。固有の地名が「寺」の一字という珍しい村でした。以前から市域には京都の八坂神社ゆかりの金心寺莊こんしんじのしょうという中世の莊園があったことが知られていました。別名を寺莊てらのしょうとも言ったため、これが寺という地名の由来との説がありました。しかし、天神三丁目に所在する金心寺は、江戸時代までは現在の屋敷町に位置していたことから、漠然と金心寺莊も屋敷町周辺だと考えられてきており、離れた寺村とのつながりがはっきり説明できませんでした。

ところが、図書館で開催された「郷土史井戸端会議」での情報交換の中で、かつて三田町と寺村町との間に金心寺橋こんしんじばしと呼ばれる橋があったという情報が地域の方から寄せられました。これで寺村町と金心寺が文字通りつながったのです。

ところで、寺莊の領主であった八坂神社は、神仏混交のもとでは祇園感神院ぎおんかんしんいんと呼ばれ、天台宗と深い関係にありました。天台宗の本山は比叡山延暦寺。坂本に位置する鎮守は山王社さんのうしやとも呼ばれる日吉大社ひよしです。そして旧寺村の氏神は山王神社。氏神からも寺村町と八坂神社とのつながりが見えてきます。



金心寺莊の古文書

寺莊に関係する古文書は八坂神社に伝わっており、市史の第3巻に収録されています。中世の莊園である金心寺莊と、寺院としての金心寺との関係ははっきりしません。また現在は真言宗に属している金心寺と、天台宗との関係も説明が必要です。

しかし「井戸端会議」での何気ない会話から、寺村をめぐる断片的な情報が見事につながり、寺という地名の由来や莊園の所在をめぐる議論に大きな一

石が投じられたのです。地域の歴史は、決して古文書や堅い研究のみから解明できるものではありません。地域の何気ない伝承や習慣も大切な歴史の資料です。「井戸端会議」の経験からは、さまざまな情報の交流の中から新たな知識が創造され、課題の解決につながる実感ができました。